アイヌ民族の衣生活について

荒井純子　村中智恵子

序　言

観光のため渡つた北海道で，多くの人々がもの珍しく見物して来られるアイヌ民族の衣服，厚司（attushi）チカラカラペ（chikar-karpe）カパラミップ（kaparamipp）ルウンペ（ruunpe）なるものが，彼等民族特有のものである事は云うまでもないが，彼等は衣服として極く古くには草，獣皮，鳥皮，魚皮，腸等を使用したようである。

人類学的な説から言うと北欧系の人種であるとか，或は又南方系の人種であるとか色々の説があるが，一見すると日本人ばなれのした彫の深い美しい顔立をしている人が多い。和人（本邦人）との結婚に憧れた結果所謂アイヌの純血を保つている家はごく少いが，彼等は混血によりより優秀な民族を作つて行くのだと豪語している。

昭和初期までの彼等は全道にわたつて点在しているようであるが，私共の最近の調査によると更に縮少され沙流川・十勝川・釧路川・石狩川・天塩川の流域にコタン（kotan）として点在している程度となり，その他の地方にはあまり居住していないようである。

彼等は現在でも前に記したような衣服を身につけて，野蛮な生活をしているかと思う人もあろうが，私共と何等変る事なく，土地によつては大変文化的な生活を営んでいる者も少くない。図1(イ)(ロ)(ハ)

図1(イ)　白老酋長の正装 1961. 8. 20. 於旭川 熊祭の後

図1(ロ)　女子の正装（阿寒アイヌ）1961. 8. 20. 於旭川 熊祭の後

大正の頃より諸儀式の時だけ使用されていた是等の衣服もだんだん少くなり，持つていない家がある位で，持つていても一，二枚大切に保管している程度である。それ等衣服には殆ど全面に豪壮華麗な文様が配され，しかも一つとして同じものを見出し得ない。

アイヌ婦人が愛する人へ真心を捧げる為に模様を工夫し一針一針に託して作り上げる事を無上の喜びとし，この技術の巧拙が婦人の価値評価の重要な要素であつた事も肯ける。

そこで私達は彼等民族が現在迄に，ど

図1(ハ)　二風谷部落の現在の平常着（1959夏）

のような衣生活を営んで来たかを次の四つの方法で調査する事とした。

調　査　方　法

一，アイヌに関する学識者に御意見を伺う。
二，古文献による調査
三，現在ある土俗品中より衣類を調査
四，現存の古老を訪ね往事の事情を聴取

本　　論

彼等が着用していた衣服を大別すると自製材料によるものと輸入材料によるものとに分類する事が出来る。

原始時代の繊維材料を見ると動物質と植物質のものとに分けられその利用度は，地理的関係から手近に得られるものに依存して居たようである。

本邦の状態を見ても植物質のものが多く，彼等にあつては極く僅かに草衣が古文献に見られる程度であり，それに比し動物質のものは今も尚博物館に所蔵されている。しかしこうした衣服も現在では博物館以外では全く見られない。これは植物質のものは繊弱である上に着流しにしたり副葬品とされた為と思われる。と共に地理的状況より動物質のものが多く使用されていたであろう事が推察出来る。

鳥類の羽毛，熊，鹿その他海獣の毛皮及び皮革を外套や下着とし，鮭，イトウの皮等も各種の形式に作り，動物類の筋や皮を裁断して糸とし，これで繕つたり更に木器類の破損さえこの糸で継いでいたと云われている。

これ等と共に草で作られた「ケラ」と称する俵様の胴着の類を着用していた様子が古文献に見られる。（江戸中期頃邦人によてつ写されたエトロフ土人の姿図2）

更に又樹皮及び毛皮製の「ハヨクペ」と称する　脈服

図2　草衣着用のエトロフ土人の姿
杉山寿栄男氏著より

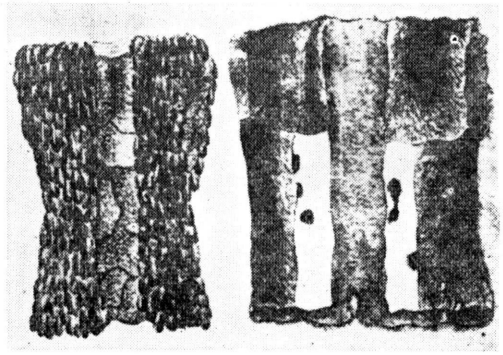

図3　ハヨクペ
鳥皮衣，獣皮衣，鳥，井竜蔵氏著より

的のものもアイヌの古服として描かれている。草，樹皮，羽毛，毛皮等の衣服の外に，樹木の内皮繊維を細く裂き，つなぎ合せて糸様のものを作り，撚をかけアイヌ独特の織機で布を織つていたが，何時頃からこの織機を使用していたものか明確でない。

次に各衣服を種類別に記す。

自製材料によるもの

獣皮衣（kap-ur 又は ur）　図3の右，熊，鹿，狐，犬，兎，その他海獣等の毛皮を皮の柔い内に縫い合せて作る。（ドルメン第3巻7号，名取武光氏著による）

熊皮，アザラシの毛皮を着物の形に縫つて厚司の下に着た。（鵡川H媼66才談）

熊皮のものは男，鹿皮のものは女が着た。むじなは4～5頭縫い合せて女が着た。（芽室K媼87才談）

狐，兎の皮は肌に着る。鹿の皮は上に着た。日常は鹿，犬の皮を着る。熊，鹿，狐等の獣皮を何枚も接ぎ合せて，フトンの様に着て寝たがとても暖かかつた。（音更H媼85才談）

鹿の皮を沼につけると毛が抜けて色も白くなり鞣したようになる。これで袖無の着物を作つた。（平取H媼71才談）

鹿の足の皮で雪靴も作る。（近文S媼74才談，平取H媼71才談）

熊，鹿の皮を柔くして男女共着た。糸は鹿のすじを裂いて用いる。（穂別M翁90才，媼88才談）

兎皮の袖無を着た。（登別K媼85才談）

以上各地の古老の懐古談によるが，着用には着用期，目的，地域等によつても異るのか毛を外にして着る事も内にして着る事もあるようである。（1957年，1959年，1961年，夫々8月調査）

腸衣　海豹の腸を縫い合せて作つた衣服

明治9年千鳥三郡取調書のウルップの部に「雨衣ハ海豹ノ腸数個ヲ縫イ合シタルモノヲ頭上ヨリ被ル」とあるからモウル類の衣服のあつたらしい事がわかる。

（ドルメン第3巻7号，名取武光氏「アイヌ土俗品解説による。」）

鳥皮衣（rap-ur）　図3の左・図4，鴨，鷲，鵜など主として水鳥の羽皮をもつて作る。一枚を着る場合は毛を内側に，二枚の場合は上のは毛を外にして着る。一枚作るのに約50羽分を要し，鳥の羽の毛，脚の皮等を上手に縫い合せて模様とする。（ドルメン第3巻7号，名取武光氏著より）

図4　皮革衣（Etoupirikaの鳥皮）
千鳥アイヌ　鳥井竜蔵氏著より

魚皮衣（chep-ur）　鮭，イトウの皮を用いる。靴も作る。

鮭50尾以上の皮を必要とし，脊と腹の色違いを利用して美しく接ぎ，鰭の部分の穴には丸く模様の様に見える接を入れる。複雑なモザイック模様が美しい。（名取武光氏著より）

鮭の皮の靴は軽くてはき心地が良く，一年位ははく事が出来た。（近文S媼74才談）

腸衣，鳥皮衣，魚皮衣を衣服として着用した事は古文献及び博物館の所蔵品として見る事が出来たが，私共が訪問した古老よりその多くを聞く事は出来なかつた。獣皮に比べて毛質，皮質共に弱いものである為，一枚の衣服を作るに要する量と手数を考えると，獣皮に恵まれない地域とか或は，これ等の材料が豊富かつ容易に入手出来る所でなければ作らなかつたのではないかと思われる。

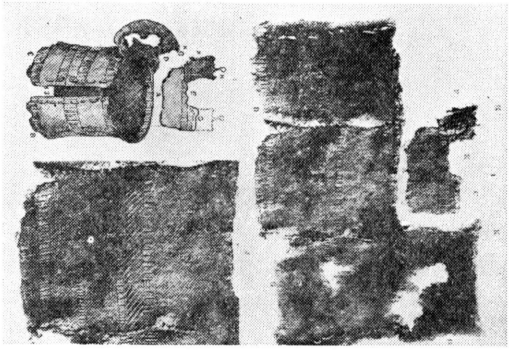

図5　草　　衣　　杉山寿栄男氏著より

図6　厚司及草衣着用の図
杉山寿栄男氏著より

草衣（kera）　図4，5，6，草（テンキ草）或は楓の樹皮を編み蓑代りに着用したもののようである。古文献によると下着に熊の毛皮をまとい，その上に俵のようなテンキ草（北方海岸砂地に密生する）で編まれたケラ（kera）と言う胴着を着用している様が見られる。又ハヨクペ（hayokpe）と云うトドの皮やイタヤの樹皮及び獣皮を綴つた一見本邦の古代武装の鎧のように固い胴着風のものや，比較的柔く綴られたものもあつたようである。

後代巫子等が呪詛の時この様な変装をして神に祈れば神通力を増すとして変装用具として使われた様である。しかし是等胴服的なものは彼等祖先の平常服であり仕事着であり且又争闘の場合の護身具でもあつたと見られている。このような衣服の土俗品は極めて少く，東京大学人類学教室，東北大学法文学教室，樺太博物館等に蔵されている由であるが私共もその全部は見ていない。

厚司（attushi）図7

◦**厚司**　オヒヨウ（at-ni）と云う楡科の植物の樹皮を剝ぎ内皮繊維をとり温泉，川，沼等に浸して晒し，薄く細く裂いてつなぎ僅かに撚をかけ乍ら糸を作り，（或ものにはヤチ水と称する鉄分の含まれている水に浸して黒く染め）無地又は縞柄に織りこの布で作つた衣服をアッツシと云う。形は身頃に撚袖（モジリ袖）又は角袖を附け衿も衽も無い着物で，袖口，脊，裾，胸等に刺繍や切伏を施している。

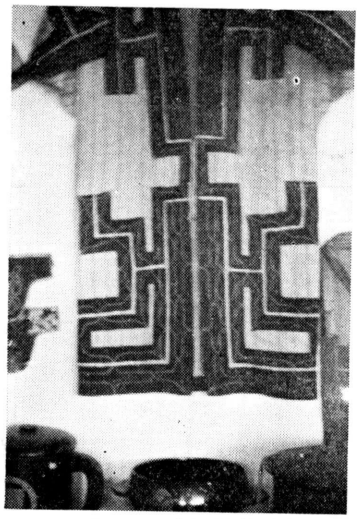

図7　厚　司　網走博物館蔵

◦**アカダモ厚司**（nikap-attushi）ハルニレ（chikisa-ni）と云う楡科の植物の樹皮を剝ぎ内皮繊維をとり，オヒヨウの場合と同様の工程によつて作る。これはオヒヨウで作つた厚司に比べると，やや硬くしかもあまり丈夫でないと言う欠点がある。濡れると繊維が吸水して目がつまり中々水を通さなくなるので雨降りの時にも着用した。

◦**シナノキ厚司**（nipeshi-ni attushi）シナノキ（nipeshi-ni）と云うシナノキ科の植物の内皮繊維をとり，オヒヨウと同様の工程によつて作ると云われているが，調査した所では糸を作る時撚をかけない由である。オヒヨウに比べ硬くあまり長くとれないのが欠点であるが強靱で採集が容易である点が優れている。

現在でも日高地方では工芸品に使用の為織られている。

◦**イラクサ厚司**（etarappe）オオバイラクサ，ムカゴイラクサ（mose-hay. ka-pay）が秋，落葉した後その茎を採集し，繊維を取り撚をかけ乍ら糸とし，布を織り着物にする。この厚司は他の厚司と比べると一段と色白く柔かく丈夫である。従つてアイヌ自製の衣服の中で最も上等上品なものとして貴ばれたが，その完成迄には他の厚司の十倍もの労力を要したので，着心地や外見は良くても，オヒヨウ，アカダモ，シナノキ等の入手し難い樺太アイヌが用いた位で，その他の地域ではよほどでなければ使用しなかつたようである。

◦**其の他柳**（susu）**山葡萄**（hatpunkar）**つるうめもどき**（nihay）等の繊維類も使用したように文献には見えているが私共はその実物は未だ見ていない。

以上記したように手近に得られる自然界の繊維質のものは　動物質であれ植物質であれ，すべて衣服材料として使用したようである。これは第二次大戦中の日本人の被服材料をふりかえつて見ても十分理解が出来る。

自製或は輸入綿布によるもの

肌衣（mour）　図8，モウルとは婦女子の下着の事である。アイヌの女が妙齢に達した時，衿元や膝元のはだかりを忌んで前を左右から縫い合せて頭から被つて着た。名称，用途，仕立て方から見ても毛皮が原形であつて，これが転じて木綿で作るようになつても尚モウルと呼んでいた事が推測される。これは本邦で衣服材料の絹から衣服をキヌと云つたと同じように衣服材料が元毛皮（ウル）であつたから，ウルが衣服の意味に使われたらしい。木綿布の入手以前は鹿，アザラシの毛皮が使用されていた事は前に記した通りである。

図8　肌　衣　鳥井竜蔵氏著より

形は和服の肌襦袢に腰巻を縫い合せたようなもので，胸紐二本がつけられこの右紐の先に玉，左紐に穴明銭をつけたと，文献に見えているが，私共の調査したものには骨製の針入れと銭がついていた。夏期は是一枚を着ている時もあり，授乳の際は下から子供を入れたとも云う。身分の高い婦人はよく玉をつけていたので，道で会つても男子は道をゆずつたそうである。

輸入材料によるもの

山靼服（Jittoku）　ジットク山靼地方及び樺太をへて北海道に入つて来た明服で，モウルに酷似し多くは唐草，雲竜風の刺繍が施され，美しい色糸，金銀糸によつて大胆華麗に作られている。山靼錦（サンタンニシキ），蝦夷錦（エゾニシキ），襤褸錦（ツヅレノニシキ）と言われ中国形式のものが多い。この外陣羽織様の錦繍衣もこれに含まれる。網走博物館，函館博物館で実物を幾つか見る事が出来たが，織り方，繍い方，色彩等の点から見ても非常に美しいものであつた。

或文献に「文祿二年蠣崎慶広が徳川家康に謁見した際樺太から伝えた明服を着ていた所家康がこれを珍品として懇望したので，直ちに脱いで奉つたと言はれているのもこれである」

と記されている事を思えば，着用したのであろうが，彼等がどの程度着用したものなのか文献によつても探る事は出来なかつたが，家の宝物として大切に保管していたのではないかと私共は考えている。

木綿衣（chimip）　木綿の長着の事である。切伏も刺繍もない手製の平常用の木綿の衣服で，和人

との交易により入手したものであるらしい。従つてその形は私共の着物と同じで，もじり袖，筒袖，長袖等いづれの形のものもあり単，袷ともある。更に綿入れ仕立のものをワタウンペ(wata-unpe）と呼んでいる。

切伏衣，布置衣（chikar-karpe）（kaparamipp） 図9，10，着物の衿，袖口，肩，脊，裾等殆んど全面に大胆華麗にアップリケ（applique）を施した美しい衣服である。和人との交易によつて得た木綿の和服の上に白又は黒の布を主体に，その他の色はとり合せ程度に配置してとじつけ，刺繍を施した衣服の事で諸儀式の時，晴着として着たようである。この切伏をイエチウヌ（iec-hiunu）と云い，その技法はテープ状に切つた布を好みの形に置いてつける場合と，はじめから模様の形に切り抜いたものをつける場合とがあり，地域別の様々な模様形式が見られ，黒布を主体としたものをチカルカルペ（chikarukarupe）と云い長着様に上から帯をしめ普通晴着用に，白布を主体としたものはカパラミツプ（kaparami-pp）と云い羽織の様に上からはおり儀式用に用いられたと文献に見えているが，地域差もあり断定はしにくいように思われる。

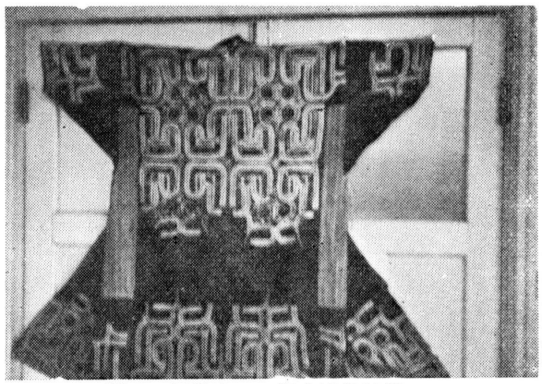

図9　切伏衣　　網走博物館蔵

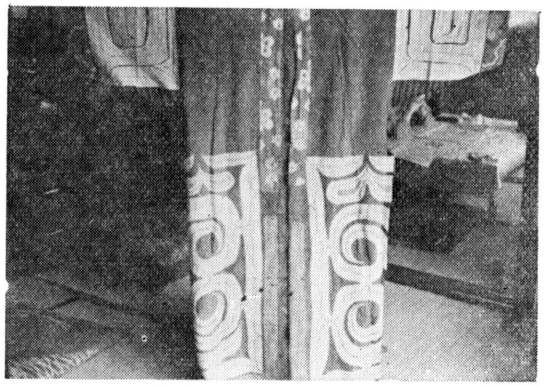

図10　布置衣　　児玉作左ヱ門氏蔵

縫取衣（ruunpe） 図11，刺繍を施した衣服である。木綿衣（chimip）の上に別布を置く事なく主としてオホカラ（ōhokara）又はイカラカラ（ikara-kara）即ちチエーンステッチ（chainstitch）による唐草模様のように見える刺繍を施した衣服で袷仕立が多い。ある文献には「単のものは切伏衣と同様に儀式の際に用いる晴着の上被で裏付の衽のあるものは多く平常着として用いられる。」と。しかし，私共の調査したところによると，近文付近では切伏衣は殆んど見られず熊祭（イヨマンテ）の時でさえこの縫取衣を着用していた。これによつても地域差を推察出来る。図1(イ)(ロ)

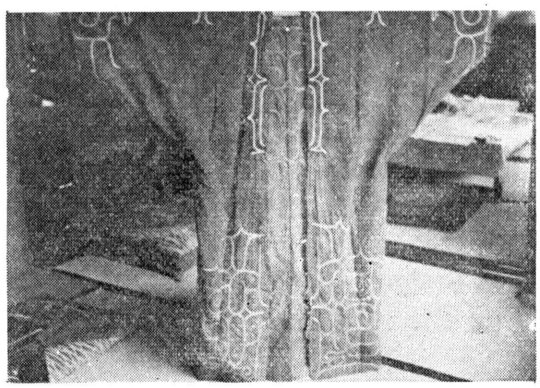

図11　縫取衣　　児玉作左ヱ門氏蔵

絹衣（saranpe） 舎蘭辺（シャランペ），本邦上流階級の婦人小袖，打掛の類を云う。柔かい織物即ち絹布の事で，コソンデ（kosonde）と云つて彼等自製の厚司や前記木綿衣に比較して柔くて美しい事を喜び，酋長の儀式用の上衣として珍重され，江戸時代の遊女の打掛，武家の姫君，奥方の古着の類が多量に移入され，彼等の欲するままに毛皮等と交易さ

れていたようで，本邦にも例の少い室町時代の肩腰衣が樺太アイヌに残つていたと文献に記されている程である。

陣羽織（Jinbaori）　本邦の陣羽織を交易又は官よりの褒賞として戴いたもので，厚司の上に羽織り男子は儀式の際に威儀を正したと言う事である。現在でも破れてはいるが目もさめるばかりの美しい朱色の陣羽織を着て肩から太刀，（エムシ emushi）を下げ頭にサパウンペ（sapaunpe）と云う冠様のものをかぶつた酋長の正装を見る事が出来る。最近では厚司を持つている人が少い為か縫取衣又は切伏衣の上にこれをはおり，正装としている。　　図1(イ)

結　　論

以上記して来たように，アイヌ民族の衣服の種類は少く，本邦その他との交易により得たものを含めようやく十種に余る程度であるが，資源の乏しかつた寒冷未開拓の地で彼等は彼等なりに身近に得られるあらゆる資材を蒐集し，彼等の天性である技術と辛抱強さにより，動物の皮を巧につなぎ合せて寒さを凌ぎ，草維，樹皮をもつて厚司を作り更に彼等独特の模様を配置する等，その創意工夫の卓抜である事を驚嘆しないではいられない。又厚司を作る材料であるオヒヨウの採集を禁ぜられてからは，アカダモ或はシナノキに依存するより方法はなく，更にその製作工程，着用感，堅牢度等に於てオヒヨウに劣るとなれば，衣服調製の道にも様々な苦難があり，木綿衣の肌ざわりの良さ，美しさ，既製である点等に無上の憧れがあつたわけである。貧しい恵まれない環境の中で入手した和人の古着或は僅かの布片，糸の類までも貴重なものとして色々に継ぎ合せ一枚の着物を構成し，和人より大柄な彼等は幅の補いに別布を配し，時には全くの別布をもつて袖をつけ等しているが，その上に施しているイエチウヌ（iechiunu）によつて見事な逸品となつている事を土俗品の上に見るにつけその秀れた才能の程を十分知る事が出来る。私共が調査した範囲での古老達の幼い頃は既に，本邦人と何等変らない衣生活であつたようで，祭に着る為に刺繍を施したり仕事着の為に厚司を織つたりと云う事さえも少くなつたようである。現在コタン（kotan）を訪ねても私共と少しも変らない衣生活を営んで居り，農民は農民の姿であり，子供，娘，主婦，男子など皆街の生活になりきつている。その他衣服の附属品としては各種のものがあるが後述することとする。

私共はこの特有な衣服が単に土俗品としてのみ残り，その製作の事さえ分らなくなる事に対してたまらない愛惜の念を禁じえない。ささやか乍らこの調査が幾分たりとも役に立つ様にと念願している。

終りにのぞみ本研究調査に対して御指導御協力下さつた，北大児玉作左衛門先生御一家，東大鈴木尚先生，渡辺仁先生，北学芸大河野広道先生，道立図書館更科源蔵先生，道立各博物館長先生，北海道新聞社，渡辺，辻山，葛西の諸氏，本学被服科長宮下孝雄先生其の他御協力戴いた方々各地アイヌ古老の方々に心から感謝の意を表しますと共に今後の御指導をお願いいたしたいと存じます。

（本報告の一部は昭和33年7月12日日本家政学会関東支部第15回例会に於て発表した。）

文　　献

◦杉山寿栄男著：　日本原始織維工芸史　土俗篇，原始篇
◦金田一京助・杉山寿栄男共著：　アイヌ芸術
◦鷹部屋福平著：　北方文化研究報告　アイヌ服装紋様の研究
◦名取武光著：　ドルメン第三巻・第四巻　アイヌ土俗品解説
◦喜田貞吉著：　ドルメン第四巻　アイヌは南方系か北方系か
◦金田一京助著：　ドルメン第一巻　アイヌのハヨクペ，アイヌの黥
◦渡辺　仁著：　民族学研究第16巻　沙流川アイヌに於ける天然資源の利用

- 伊勢祭檍丸撰・常陸間宮倫宗増補：　蝦夷生計図説
- 民族工芸研究会：　北海道原始文化聚英
- 河野広道著：　蝦夷往来第三号　アイヌ織物染色法
- 知里真志保：　分類アイヌ語辞典　植物篇
- 更科源蔵著：　北方文化シリーズ　I
- 河野広道著：　〃　II
- 河野広道著：　〃　IV
- 高倉新一郎著：　北辺開拓アイヌ
- 牧野富太郎著：　牧野日本植物図鑑
- 東京大学人類学教室保管：　Dr Manro 手記より
- Rev John Batchelor : The rerigion superstitions and general history of the hairy aborigines of Japan. The Ainu of Japan.
- Dr John Batchelor : Ainu life and lore.
- George Montandon : La Civlisation Ainou et les cultures arctioues.
- R. Torii : Etudes Archéologiques et Ethnologiques. Les Ainou des iles Kouriles.